

#### 【4】生徒の実態

生徒一人ひとりの教育課題を明らかにするための実態把握は、比較対照しやすい利点から、昨年度までと同様の検査・調査を実施した。一人ひとりの発達段階を踏まえ、落ち込み分野への働きかけを考えていく資料とすると同時に、学部という大きな集団の傾向をつかむ資料ともした。

高等部という学部の独自性から、間近に控えた『社会参加』を意識した「生活する力」を高める指導が教育活動の主流となるが、「コミュニケーション」に関係した分野からの働きかけによる、社会的自立度の全体的な広がりを期待し、具体的な手だてを検討することとした。

##### (1) 集団編成

表2 高等部の集団編成

	生徒		担任		主 障 害	本校への入学時期
	男	女	男	女		
1 年	8	3	1	1	・自閉的傾向(2) ・ダウン症(2) ・てんかん(1) ・プラターウィリー(1) ・筋緊張亢進症(1)	小学部 ～2人 中学部 ～3人 高等部 ～6人
2 年	7	4	1	1	・自閉的傾向(1) ・ 孔脳症(1) ・LD(1) ・てんかん(1) ・脳水症(1) ・結節性硬化症(1)	小学部 ～0人 中学部 ～1人 高等部 ～10人
3 年	4	4	0	2	・自閉的傾向(2) ・言語障害(1) ・ダウン症(1) ・CP後遺症(1)	小学部 ～2人 中学部 ～3人 高等部 ～3人
計	30		級外 2		入学時期：小学部～4人 中学部～7人 高等部～19人	

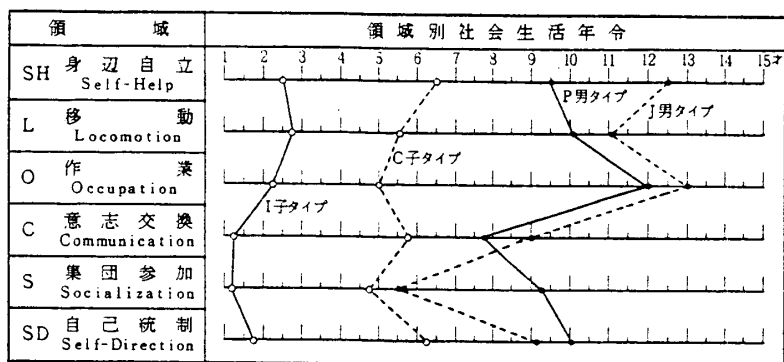
表2に示すように、高等部30名中半数以上が、本校への入学が高等部からとなっている。これらの生徒たちが高等部に入学する前は、小中学校の心身障害児学級に在籍していた場合がほとんどであるが普通学級から本校へ入学してきた生徒もいる。このような生徒たちは、小集団のなかで教科学習を主として学習してきており、基礎学力の面では比較的優れているが、生活経験や自信を持って生き生きと活動した経験が乏しく、自主的に人と関わるのが苦手、他からの働きかけを待つ傾向がみられる。自分づくりでは、自己客観視の芽生えを迎える段階にいる生徒が多い。

小中学部から入学してきた生徒たちは、発達の遅れや偏りが比較的顕著にみられ、身体的な発達と精神面の発達がアンバランスで幼さがみられる。楽しみのある活動は好むが、自制したり苦手なことに取り組むことが難しく、「話す・聞く・書く」というような基本的な力の習得が十分でない。自分づくりでは、自制心の形成から自己客観視の芽生えの間にいる生徒が多い。

一人ひとりの障害の特性や、高等部入学以前にどのような学習や経験をしてきているのかをよく把握したうえで指導にあたり、できないことがあるとすれば、それは障害特性によるものなのか、発達段階が達していないのか、未経験・未学習なのかをよく見極めて手だてを考えていかねばならない。

(2) 諸検査による生徒の実態

① S-M社会生活能力検査



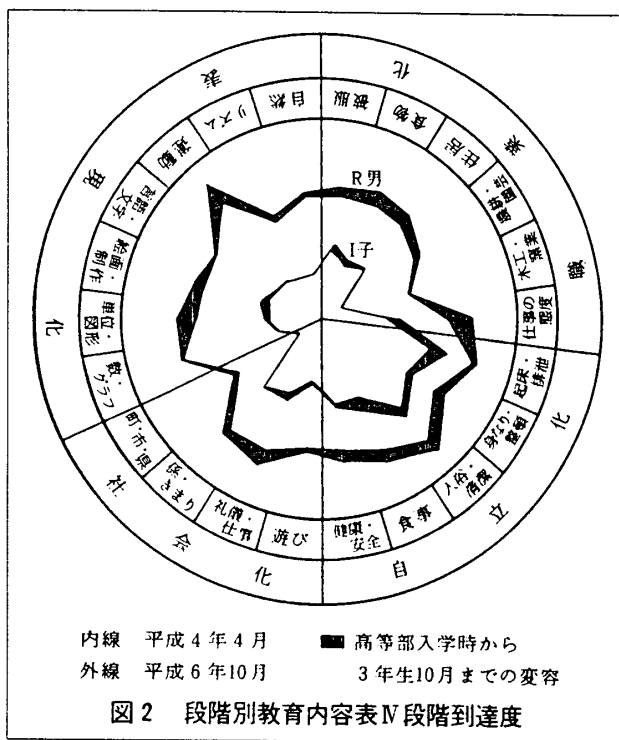
※社会生活年齢は、3歳4か月～11歳6か月に分布している。

「意志交換」「集団参加」の領域別社会生活年齢に落ち込みがみられる生徒が15名あった。(検査日平成6年5月)

② WISC-R知能検査結果 (17歳以上の生徒の検査値は16歳11か月30日で換算した)

IQ	40以下	40～49	50～59	60～69	70～79	80以上
人数	9	3	8	6	3	1

③ 段階別教育内容表による評価



【諸検査の結果から】

- 高等部の生徒の発達年齢は全体的にみると大きな開きがあるものの、6～7歳の段階にある生徒が大半である。
- ①の結果から、「意志交換」「集団参加」の分野での落ち込みが顕著にみられ、自己表現や人との関わりの力を高めていくことが望まれる。
- ②の結果から、知的な能力に幅がみられ、理解力や表現力での個人差が大きいと考察される。一人ひとりの力を高めていくためには、グループ編成に工夫をし、個に応じた配慮が必要だと考えられる。
- ③では、プロフィールの広がりには個人差があるが、他との比較ではなく、その子の中の全体的な広がりや、落ち込みがみられる分野の高まりを意図した取り組みの必要性が読み取れる。

「職業化」については未経験なことが多いため、高等部教育によりプラスの変容が見られやすい項目である。「自立化、社会化」は、一人ひとりの生活経験と家庭環境によるところが大きく、学習として継続実践すれば変容が望める可能性がある項目だといえる。「表現化」では、「知的障害」そのものが落ち込みの理由の要素でもあるため、さらに高次の段階への高まりは難しいといえる。

(3) 「自分づくり」の実態

一人ひとりの発達段階から推察される「自分づくり」の段階は、次ページの通りである。

自己内対話の段階		各段階の特徴
自我の拡大 ～ 自制心の形成	10名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校生だからがんばるという気持ちが。芽生えてくる。</li> <li>・自分のペースが大事にされれば、集団の中で活動ができる。</li> <li>・具体的な行動や出来事を振り返ることができる。</li> </ul>
自制心の確立 ～ 自己客観視の芽生え	16名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大人扱いを誇り高く受け止め、大人らしくなってくる。</li> <li>・自分の要求を他人にあわせて行動できるようになる。</li> <li>・行動の前にまわりを見直しプラス評価の期待に答えようとする。</li> </ul>
自己客観視の確立	4名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大人扱いを当然のこととし、一人前にみえてくる。</li> <li>・自分のプラス面だけでなく、マイナス面も認められる。</li> <li>・一方的な他人批判や憧れのため人間関係で失敗しやすい。</li> </ul>

生活年齢を考慮しながらも、実態に応じた適切な指導者の声かけや働きかけ、学習内容の設定などの配慮を取り入れて指導していかなければならない。

指導者の観察による考察も含めて、次のようにコミュニケーションに関する実態をまとめた。

コミュニケーションの実態
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習中や緊張場面では相手の顔を見ることができず、小声になりうまく話せない生徒が多い。</li> <li>・慣れた相手となら関わりを持とうとして、やりとりを楽しむ生徒もいる。</li> <li>・指示や声かけを待ち、自分の考えや思いで他と関われない生徒が多い。</li> <li>・伝えたいことがあってもどのようにして話せばよいのかわからなかったり、伝えようとしても相手にうまく伝えられなかったりした経験を持つ生徒が多い。</li> <li>・相手の話していることをよく聞いていなかったり、内容が理解できず、受け答えがちぐはぐであったりし、やりとりが一方通行になりがちである。</li> <li>・社会性が乏しく、場に応じた言動を身につけていない。</li> <li>・場を意識するのが難しい生徒が多い。</li> <li>・書きことばの習得が不十分で、文字を書くことへの苦手意識を持つ生徒が多い。</li> <li>・社会との関わりが限定されていて、地域や社会への関心は薄い。社会の中の一員であるという意識が十分でない。</li> </ul>



コミュニケーションの力が乏しい原因として考えられること
<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達の遅れや障害による。</li> <li>・やりとりの楽しさや、通じ合う喜びの経験が乏しい。そのため、進んで相手と関わることができなない。</li> <li>・行動範囲が限られているため、未経験なことが多く場慣れをしていない。</li> <li>・今までの生活の中で、進んで話さなければならぬような場面が少なく、困ったことや問題の解決を周囲の人々にまかせていた。また周囲の人々がその場を与えなかったため必要感がなかった。</li> </ul>

- ・文字や音を間違えて覚えてしまい、その修正ができていない。
- ・少人数の中で生活してきた生徒が多く、集団の中で他と関わりを持った経験が少ない。



方針・手だて

- ・生活年齢や思春期の心理特性を考慮して発達を促し、落ち込み部分を引き上げる働きかけを行う。
- ・生活に根ざした内容や地域の中での活動を取り入れた単元の設定やその指導計画の作成をする。
- ・何事にも目的意識や必要感を持たせて、主体的な活動となるように配慮する。
- ・指導者がよき話し手・聞き手であるように努め、授業づくりを充実させる。
- ・対指導者との関わりだけでなく、友だち同士のやりとりの場を設定していく。
- ・自分の課題を認識させ、その課題を意識させながら学習に取り組ませる。



めざすコミュニケーション像 相手を意識してすすんで自己表現する子

我々は、めざすコミュニケーション像を次のように捉えている。

『相手を意識して』

相手の話をよく聞き取ろう、わかるように伝えようとして関わり、正しく聞き取る力・理解する力・表現する力など「伝達の手段の向上」が必要となる。

また、「相手が言いたいことは何なのか・自分に要求していることは何なのか」を、自分の頭の中にイメージしながらやりとりする力も要求される。このようなイメージできる力が培われてくれば、相手とのやりとりの最中に思考をめぐらして「今、この人はこのことを言っているのだな。そして、私にこういう答を返すことを望んでいるのだな。」と、相手の思いを読んでやりとりができるようになると考えた。

『すすんで自己表現する』

主体的に他と関わろうとする意欲を持ち、自分の思いや考えを表現しようとする力の高まりをねらう。思春期を迎え、人前での自己表現に恥ずかしさがあり、なかなか勇気が持てないという青年期ならではの実態がある。ただ、主体的に関わろうとしていればよいというのではなく、「必要に応じて」「時や場を意識して」関わろうとする意欲を育てていきたいと考えた。

自己表現の方法は、なるべく社会に通用する表現方法を身につけさせたい。

なお、1年次より、生徒の実態を総合・分析した結果から、コミュニケーションの力が乏しいこと  
の主な原因を「理解度や表現力が低い」「心理・対人関係に問題がある」「自閉的傾向がある」という  
3つの枠組みで捉え、各グループから1名ずつを個人事例として取り上げて、指導方法の模索を行っ  
ている。本年度は「自分づくり」の視点からの取り組みを重視した。165ページより、その詳細を紹介  
する。